

最近のC I S中央アジア

中村 泰三

はじめに

'96年9月8日から22日にかけて、大崎平八郎ユーラシア研究所長を団長とする第7回ソ連・C I S経済視察団に参加してタジキスタンを除く旧ソ連中央アジア諸国を馳足であったが訪れ、C I S中央アジアの現状をみることができた。わが国で中央アジアの実情はこれまで断片的に紹介されてきた（キルギスタンは金田辰男氏を中心に日本から経済調査、援助が行われ、日本・キルギスタン友好協会も活動しているので、資料も出版され比較的良好に知られている）。今回は四カ国を訪問し、その現状の相互を比較することができたのと、視察の前後にモスクワのロシアアカデミーに立寄り、ロシアの中央アジアに対する関心、方針、政策の評価をきくことができたので、短期間の視察であったが、成果を挙げたように思っている。また、それぞれ専門の異なる団員が参加したので、多面的な調査ができたのも効果的であった。二週間で約30カ所の各種官庁、研究所、企業を訪問、インタビュー並びに見学を行うという非常に過密なスケジュールで、その上いろいろの障害があったが、スケジュールを予定通りこなせたのは幸いであった。

中央アジア全体の印象

中央アジアは思ったより平静であった。タジキスタンの紛争をタジキスタンだけに閉じ込めたのが成功している。訪れた首都はいずれも町並が以前よりカラフルになり、清掃も行き届いていた。民営化の中味に問題があるようであるが、多くの店で西側の消費財を販売している。西側資本や合弁によるホテルが次々と建設され、そこでのサービスは西側のそれとさして変わらない状況であった。例えば、トルクメニスタンでは20以上の新しいホテルが建設され、四つ星、五つ星のホテルが外資、合弁企業により運営されていた。もっとも古いホテルはソ連時代の面影を色濃く残し、特に、設備の貧弱さは新しいホテルと対照的であった。

最近アフガニスタンでタリバンが首都を征圧し、その支配地域を北に拡大しつつあるので、

表1 中央アジア諸国と人口

	面積 (1000km ²)	人口(96.1) (1000人)
カザフスタン	2717	16533
キルギスタン	199	4547
タジキスタン	143	5885
トルクメニスタン	488	4565
ウズベキスタン	447	22978

出典：「1995年のC I S統計」'96, M.



図1 キルギスタン、ビシケク市郊外
乾燥地で山に草木はなく、緑の樹木は灌水による

ロシア、中央アジア諸国の警戒心が高まっている。現下のタジキスタンでのロシア軍の国境警備力で抑えきれず、タジキスタンに近い、また、タジク人の多いウズベキスタンへの影響を考えるとときわめて深刻で、ウズベキスタンに紛争が拡大すれば、C I S中央アジア全体に影響が及ぶからである。現にキルギスタン大統領府に国務長官（御本人の日本語による説明では副大統領職に近いという）のイシェンバイ・アブドゥラザコフ氏の部屋を訪れた時、本年9月12日現在のタジキスタン・アフガニスタン状況と題した両国のゲリラ、軍隊の配置図がかけあり、この問題についての中央アジア諸国の緊張状態と関心がうかがえた。

中央アジア諸国が独立国になったと思ったのは空港に駐機している航行機の機腹に各国のエアライン名が入っていること、各国の通貨がそれぞれ異なっていること、各国の入国にビザの取得が必要なこと、地元言語の使用度が高くなっていることなどであった。

地元言語の使用比重が高くなっているのは、都市の道路標識や雑誌、新聞が地元言語で書かれているものが多いことから明らかである。ウズベキスタンでは地下鉄の標識、車内の案内

がウズベク語でなされ、かつてロシア語を使っていたのとは大きな変化であった。

また、トルクメニスタンやウズベキスタンでキリル文字からラテン文字への移行が進みつつあり、ウズベキスタンでは2000年にラテン文字に転換する計画で、これまでのロシア一辺倒の姿勢からみて大きな変化である。

中央アジア各国では民族意識の高揚が認められるが、その代表例はウズベキスタンのアムール・チムールの復活であろう。かつてはモンゴルのジンギスカン同様、表に出すものはばかり有様であったが、タシケントのかつてのスターリン像のおかれた都心の公園に騎馬姿のチムール像がおかれ、近くに立派なチムール博物館が建設され、この十月から開館するという。また、チムールについて書かれた書物も多数出版されていたが、大部分ウズベク語で書かれ、ロシア語のものはきわめて少ない。この傾向はカザフタンでもみられ、在住ロシア人の反発を買っている。また、大ウズベキスタン意識は隣国の大國カザフスタンと対立するものであるし、キルギスタン、トルクメニスタンも反発するので、今後の共存という視点から注目する必要がある。

民族意識の高まりと同時に歴史的記念物、遺跡の修復が早いテンポで行われている。サマルカンドがそうで、かつてのゆっくりした修復スピードと異なり、修復が進み、以前よりきれいになっていた。これにはもちろんツーリズムの振興、外国人客の誘致による外貨の獲得と関係がある。現地の話では外国人観光客は一時減少（1/10に）したが昨年より回復し始め、ドイツ人、日本人が多いとのことである。もっとも、マルクは現地で通用するが、日本円は通用しないという違い、ルフトハンザがタシケントに乗り入れているが日本のエアラインは未だ入っていないという違いはある。



図2 アルマトイの高麗日報社

中央アジアは朝鮮人が多く居住しているところであるが、カザフスタンではカザフ語を理解できない朝鮮人が解雇される風潮が出ていて、中央アジアの米作の発展に貢献した多くの朝鮮人が農場を解雇され、町に出てきているときいた。

一方、ウズベキスタンのタシケント近郊の「ポリトデル」コルホーズは朝鮮人の多数働いている優良農場で、ソ連時代から外国人の見学が許される模範農場として知られていたが、今回訪問することができた。副議長の話では、ここで働く朝鮮人はウズベク語を解するので、前記のような問題は生じていないとのことであった。

かつて朝鮮人コルホーズといわれたが、その後4つのコルホーズが合併し、現在2000人余の



図3 「ポリトデル」の文化会館
朝鮮語、ロシア語、ウズベク語で表示している



図4 ウズベキスタン、タシケント郊外の農場
緑花畑 左 朝鮮人 右 ウズベク人

労働者中、朝鮮人が25%、ウズベク人が35%、カザフ人が40%を占めている。朝鮮人は非農業部門のビジネスに転出していく人が多く、労働者中の民族比率が減少している。コルホーズは現在閉鎖型の株式会社に変化し、労働者に株式を分与している。事務所はかつての朝鮮人コルホーズの建物を使っていて、写真のように朝鮮語、ロシア語、ウズベク語で掲示が出ている。会社の耕地は7,000ha、うち3,800haが灌漑地で綿花、小麦、とうもろこし（種子用）、飼料作物、野菜（温室）を栽培し、牛を2,000頭飼っている。利益を計上し、アメリカ製のコンバインを購入するほどであり、労働者の月収は3,500スムであるので、飼料価格の上昇などいろいろ問題はあるが、今も業績は悪くない。

中央アジアの朝鮮人については団員のなかで関心をもっている研究者がいていずれ発表すると思うが、今回95年発行の「カザフスタンの朝鮮人の歴史と文化」を入手しているので、この本の内容については別の機会に公表したいと思っている。

タジキスタンを除く中央アジア四カ国は、その政状に違いがあり、カザフスタン、キルギスタンは開明派の大統領が国をリードし、民主化



図5 トルクメニスタン大統領ニャゾフ氏の肖像画

を推進しているが、ウズベキスタン、トルクメニスタンは旧ソ連共産党の地元トップが大統領になり、独裁政治を行っている。特に、トルクメニスタンでは各所に大統領の肖像画がかけられ、紙幣にも大統領の半身が描かれていささかうんざりさせられた。また、空港での荷物検査も厳重であった。

ところで経済は民主化を進めている国が必ずしも良いわけではなく、ウズベキスタンの経済が活発なように見受けた。トルクメニスタンの経済の現状は、資料をあまり公表しない国で分らない点が多いが、悪化しているという観方もある。もっとも天然ガスの世界的産地という強味をもっている。

それはともかくこの地域が第二の中東と呼ばれ、石油、天然ガスの巨大な埋蔵量が世界の注目を引いている。従って、西側各国と石油資本の関与が進み、この点でわが国が立ち遅れていたが、本年に入ってわが国の公的援助が石油、天然ガス資源の深査開発、石油精製施設の改修に向けられるようになった。もちろん、ロシアも無関心ではありえず、積極的に介入しているが、西側の攻勢は強力である。しかし、ロシア側は過去からの関係があり、自信をもっているように見受けた。

中央アジアの弱点は海への出口のないことであるが、パイプラインの施設についてトルクメニスタンでのきき取りでは、アフガニスタンからパキスタンへ出るパイプラインが有望という説明が印象に残っている。われわれは戦乱の続くアフガニスタンは危険と思うが、話についてはという先方の説明であった。もちろん、中国を横断して東部の港にのびるパイプラインもプロジェクトに入っているとのことであった。しかし、どのルートをとるかという決定はロシアがロシアを通るルート以外のルートの選択に難色を示すので、カザフスタンでも自国産の石油の輸出ルートの決定は経済的観点だけから決められるわけではない。

なお、アラル海をめぐる環境破壊は地元の大問題であるから説明はきいたが、この問題は別の機会に論じるとして、地元でいぜんシベリア河川の南流に固執しているのが印象的であった。ロシア側の見解をロシアアカデミーできいたところで、この問題は慎重に検討、研究するとのこと、早急な具体化は認められないとの見解を示したが、全く駄目だといわなかったと理解している。

ここではカザフスタンを中心に現地でえたわが国で入手困難な資料をもとに、宗教、人口移動の二点について報告しておきたい。

カザフスタンの宗教活動

社会主義国家ソ連邦の時代、宗教的活動は抑圧され、多くの人が宗教から離れ、一部の老人を中心に細々と続いていた。もちろん、ソ連社会の閉塞状況が進む1970年代より、宗教に近づく人が増えていたとはいえ、いぜん信仰する人は少なかった。

中央アジアは中世以降ムスリムの勢力範囲に

入ったところである。革命後は宗教活動は押え込まれ、わずかのモスクが存在しただけで、一般大衆の宗教離れが進んだといわれた。もっとも西側では70年代からソ連から出国したユダヤ人やドイツ人を中心に詳細なインタビュー調査が行われたため、中央アジアは見かけ上の宗教離れとは裏腹に、社会全般にイスラミ的規範の存続していることが知られていた。それでも公然と宗教活動が行える状況になかったことも事実である。

ベレストロイカ以降、特に独立以降状況は一変した。イスラミを中心とする宗教活動が公然化し、イラン、サウジアラビアなどのイスラミ圏からの援助もあり、モスク、メドレセの建設が進み、その一端は1994年の経済視察でロシア連邦のタタールスタンを訪れた時に確認できた。

今回の中央アジア訪問でも、各地のモスクの修復、建設が進み、一部女性の服装にも変化（若い女性でも地味な色の服を着、チャドルをかぶっているのをみかけた）がみられた。なかでもトルクメニスタンの首都アシガバトの都心に建設中（大部分完成）の大モスクに驚かされた。

墓地も訪れたが、近年石碑を立て、石に写真を焼きつけた、イスラミ本来の簡素な土盛りの墓と異なる多くの新しい墓をみた。もちろんこの石碑にはイスラミを表す三日月が入れている。



図6 アシガバト都心の大モスク建設現場



図7 イスラミの新しい墓

この墓の形態はロシア各地に見かけるもので（三日月の代わりにカマ、ツチを入れていたが）、その影響と思われるが、これまでの土盛りだけの墓（小さい石をのせる場合が多い）との並存が印象的であった。

上記のような変化が生じているが、宗教復活の状態について、その詳しい計量的把握についての資料が見当たらないこともあり、明らかでなかった。今回カザフスタンで宗教に関するインタビュー調査の結果を記した資料「カザフスタン住民の宗教性の水準と信仰上の知識」を入手したので、その一部をここで紹介し、関心ある人々の参考に供したい。

この資料はカザフスタン発展研究所の社会研究センターが、首都アルマトイと19の州の2,910人からインタビュー調査を行った結果を公表したもので、1995年に調査したものと思われる。カザフスタンはロシア人の居住者の多いところで、イスラミのみならず、キリスト教の信仰についても扱っているので大変貴重な資料といえる。

まず宗教との関係についての調査では、全体の39.7%が信仰し、55.9%が不可知論者、つまり信仰への関心をもっていて、4.4%が無神論者という結果が出ている。

民族間の宗教によせる関心の違いの調査では、

表2 宗教の影響度

	I	II		I	II
マンギスタウ	36.6	11.9	カラガンダ	20.7	27.5
ジャンビル	36.4	10.5	西カザフスタン	17.9	24.5
東カザフスタン	33.2	13.9	パフロダル	22.0	23.4
クズイルオルダ	31.3	14.8	北カザフスタン	25.6	23.0
南カザフスタン	30.1	16.8	アクチュビンスク	24.4	22.1
セミパラチンスク	29.1	14.5	タウディコルガン	23.3	21.6
トルガイ	27.9	15.4	コスタナイ	24.1	20.4
アルマチンスク	25.6	20.7	アクモリンスク	23.7	20.3
コクシエタウ	25.4	19.4	アルマトイ市	24.7	18.4
ジェズカズガン	25.3	21.8	アテイラウ	23.3	17.5

「カザフスタン住民の宗教性の水準と信仰上の知識」 p.11

ウズベク人が最も信仰者数が多く、75.8%に達し、それに対してカザフ人は47.1%と低く、ヨーロッパ系諸民族はアジア系より低い。一般に中央アジアではカザフスタン、キルギスタンがウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタンよりムスリムの影響が少ないところといわれているが、調査の結果はそれを裏書しているようである。

宗教の影響がここ数年増大したかという問い

に対し、30.1%がそうだと答え、22.1%がそのようだとしている。否定的な答えは39%（否は26.0%）で、解答困難は8.8%であった。

興味を引く調査は表2のように、宗教の影響がI—最も影響が強い、II—影響が最も少ないとする結果で、南部諸州（図8参照）に影響が大きいと答える人が多く、北部諸州で少ない。

次に宗教別の分析が報告されているが、最大の信仰者をもつムスリムは現在全国に約600の

図8 カザフスタンの行政州



表3 州別ムスリムの影響度の評価*

アクモリンスク	+10.3	マンギスタウ	+20.6
アクチュビンスク	+11.4	パフロダル	+16.0
アルマトイ	+14.8	北カザフスタン	-6.1
アルマティンスク	+13.6	セミパラチンスク	+11.9
アテイラウ	+5.0	タウディコルガン	+17.8
東カザフスタン	-1.7	トルガイ	+14.5
ジャンビル	+29.3	南カザフスタン	+24.6
ジェズカズガン	+27.6	* 影響が強い、著しいから 著しくない、低い集計数字 を引いた結果	
西カザフスタン	+3.1		
カラガンダ	+5.8		
クズイルオルダ	+23.8		
コクシェタウ	+8.2		
コスタナイ	+3.3		

出典：前表と同じ p.17

ムスリム連合体を組織している。1989年には44しかなかったもので、その増加ぶりは目覚ましい。また、その多くは南部に集中していて、南カザフスタン州161、アルマティンスク47、ジャンビル37、グズイルオルダ33、パフロダル20、コクシェタウ18、タウディコルガン18、セミパラチンスク17、アクチュビンスク15、ジェズカズガン15、トルガイ12となっているが、どの州でも数十のモスクが建設されているという。

ムスリムの影響について、非常に著しいと非常に低いという解答間の差を各州ごとに示した結果は表3の通りである。これをみてもジャンビル州を筆頭に南部諸州のプラスの数値が高く、北カザフスタン州のように北部や東部の東カザフスタン州でマイナスになり、ムスリムの影響についての地域差が明らかである。影響についての数値の低いところは、ロシア人を初めヨーロッパ系民族の多いところである。南部のジャンビル州ではムスリムの影響が大きいと評価する人が44.2%、著しいとする人は22.4%を数えている。反対に北カザフスタン州では19.1%の人がムスリムの影響を低いとし、23.5%が著し

くないとしている。

一方、ロシア正教はカザフスタンがロシア人居住者の多い国であることから一大勢力をもち、現在177の教区が国内にある。そのうちアクモラ州が最も多く(17)、以下アルマトイ州(16)、カラガンダ(15)、北カザフスタン(14)、コスタナイ(13)、南カザフスタン(13)、東カザフスタン(10)、タウディコルガン、セミパラチンスク、コクシェタウでそれぞれ8となり、北部と南部のアルマトイ州で多い。

報告では教会が主権国家カザフスタンに住むロシア人の民族的自覚形成に、教会の社会的イデオロギーを向けているという微妙な指摘がみられる。もっともムスリムに比べてロシア正教会の影響力が少ないという結果も出ている。

被調査者の12.3%が正教会の影響力を高いとし、16.1%が著しい、22.0%が中位としている。高い影響をもつと答えた人の多くは北カザフスタン州で30.4%、南カザフスタン州26.9%、アクチュビンスク18.2%、タウディコルガン15.6%、カラガンダ州で13.8%である。北カザフス

タン州の結果は当然としても、南カザフスタン州の数字の高いのが注目される。

その他の種々の調査結果は省くが、結論で住民の宗教性の恒常的増大が認められ、特に、ムスリム宗教連合体の迅速な成長が指摘されている。また、外国からの伝導はムスリムだけでなく、プロテスタントでも顕著で、今後の市場経済の発展と共に、プロテスタンティズムに引かれる人々の数が増大すると予測している。

カザフスタンの人口移動

ソ連崩壊前後から生じている人口移動の主流の一つは、各国の少数民族のそれぞれの本国への帰還である。最も顕著なのが中央アジアやカフカスからのロシア人のロシアへの帰国である。また、武力紛争によるアゼルバイジャン、アルメニアのように抗争相手国に居住していた両民族が本国やロシアに流出する現象、バルト地域、特に、エストニアとラトビアにみられる言語政策によってロシア人を中心とした諸民族の縮小ともいえる政策によるものである。

中央アジアの場合、民族意識の高揚、民族間の争い、地元民族優先政策によるロシア人を初めとした少数民族のロシアその他の国への流出、ユダヤ、ドイツ人のC I S外への出国などによるものである。中央アジアでは急激な少数民族の流出により、民族構成の変化、一部共和国の人口減少などの現象が生じ、これが西側研究者に注目されたのである。

ところで中央アジアは上記理由により、人口流出の激しいところである。特に、タジキスタンでは武力紛争により、国内が戦場となったところから30万人居住していたロシア人の大部分20数万が引揚げ、引揚げる力のないロシア人の現地での苦難の生活がロシアの新聞に報道され

ている。帰国者の多くは難民と認定され、各地に居住しているが、政府の援助も少なく、帰国しても恵まれない、不安な生活を送っている。難民はどこでも居住できるのではなく、モスクワから100Km以内は受け入れていない。また、ウズベキスタンのサマルカンド（タジク人が多い）でもタジク難民を受入れていない（ドイツ、ユダヤ、ロシア人は流出しているが）と現地住民が説明してくれたが、ウズベキスタンのタジク人問題に原因があるように思われた。

カザフスタンの人口は最近2、3年を除いて増加していて、ここ30年間は40%近くの増加である。その多くがカザフ人の増加であり、それ以前の革命時、革命後の混乱期、集団化時代の多数のカザフ人の殺害、外国への逃亡によるカザフ人人口の減少と比べて、その相違は顕著である。

近年の人口移動はかつての流入地域であった中央アジア、その他の地域を流出地域に変え、その主流出先がロシアとなった。特に、ロシア人の本国帰還が目立ち、この現象がロシアを初め西側諸国の研究者の注目を引き、これまでに、これに関連する多くの論文、書物が出版されてきた。ここでは最近の状況を数的に把握できるカザフスタンを中心に、中央アジアの人口流動を眺めてみたい（キルギスタンについては東報告がある）。

今回カザフスタンを訪問し、現地でカザフ人のカザフスタン全人口に占める比重が50%になったという発言をきき、これまでの状況から誇大にしているのかと思ったが、後述のように統計上からはそのようになる。つまり、ロシア、ドイツ人の比重の減少が続いているのとカザフ人の人口増が主因で生じたものである。

96年出版された1995年の「カザフスタンの人

表4 カザフスタンの民族別流出

	1994年1月～9月					1995年1月～9月				
	(1) 流入		(2) 流出		(1)-(2)	(1) 流入		(2) 流出		(1)-(2)
	人	%	人	%	人	人	%	人	%	人
全民族	54,923	100	362,805	100	-307,882	53,187	100	251,809	100	-19,862
カザフ	15,912	29.0	10,540	2.9	5,372	13,251	24.9	8,579	3.4	4,672
ロシア	23,812	43.3	210,245	57.9	-186,433	25,992	48.8	131,593	52.2	-105,601
ウクライナ	3,528	6.4	27,524	7.6	-23,996	3,409	6.4	18,159	7.2	-14,750
ベラルーシ	614	1.1	5,451	1.5	-4,837	579	1.1	3,595	1.4	-3,016
タタール	1,627	3.0	10,015	2.8	-8,388	1,454	2.7	6,217	2.5	-4,763
ウズベク	763	1.4	2,111	0.6	-1,348	583	1.1	2,320	0.9	-1,737
ドイツ	2,148	3.9	74,139	20.4	-71,991	2,226	4.2	66,899	26.5	-64,673

出典：1995年の人口状況，p.71

表5-1 ロシアと中央アジア諸国との流出入（1,000人）

国名	(1) 流入						(2) 流出						(1) - (2)					
	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1990	1991	1992	1993	1994	1995
カザフスタン	157	129	184	196	346	241	103	99	87	69	42	50	55	30	97	127	304	191
ウズベキスタン	104	69	112	91	147	112	38	33	26	21	11	15	67	36	86	71	135	97
タジキスタン	51	28	73	69	46	42	11	10	6	6	4	3	40	18	67	63	42	38
トルクメニスタン	15	13	19	13	20	19	10	9	7	6	3	2	5	5	12	7	17	17
キルギスタン	39	34	63	97	66	28	18	14	13	10	10	10	21	18	50	87	57	18
計	366	273	451	466	625	442	180	165	139	112	70	80	165	108	312	354	555	362

出典：ロシアの人口年鑑1995，1995年のロシア連邦と人口移動による

表5-2 中央アジアとロシア連邦との人口移動（1,000人）

	カザフスタン		キルギスタン		タジキスタン		ウズベキスタン		トルクメニスタン	
	1994	1995	1994	1995	1994	1995	1994	1995	1994	1995
中央アジアからロシア連邦へ	346	241	66	28	46	42	147	112	20	15
そのうちロシア人	259	187	50	20	28	24	99	73	14	13
ロシア連邦から中央アジアへ	42	50	10	10	4	3	11	15	3	2
そのうちロシア人	25	33	7	7	2	2	5	9	1	1
流出-流入	-304	-191	-56	-18	-42	-39	-136	-97	-17	-13
そのうちロシア人	-234	-154	-43	-13	-22	-22	-95	-64	-13	-12
1889～95年のロシア人の 中央アジアからの純流出	-663		-190		-184		-361		-58	

出典：1995年のロシア連邦の人口と移動、リバコフスキー論文による

口状況」によると1994年1～9月と1995年1～9月の民族別人口流出は表4のようになり、ロシア人約30万人、ドイツ人約14万人の流出が観察され、両年のそれぞれ9ヶ月間に計50万人の流出がみられる。ところで1989～1993年の流出超過はロシアとの関係で、ロシア人79万人の流出であった。

特に、ロシアへの人口移動はロシア人の多数の出国のため流出超過で、その具体的な数字は表5-1の通りである。もっともロシアへの流出といってもロシア側の資料によれば、流入人口の60～70%台がロシア人なので、ロシア人の流出は表5-2のようになる。いずれにせよ90年以降中央アジアからおよそ200万人の流出超

表6-1 出生、死亡、自然増加率（1,000人当り）

	1989	1990	1991	1992	1993	1994
出生	23.0	21.7	21.0	19.9	18.6	18.2
死亡	7.6	7.7	8.0	8.1	9.2	9.5
自然増加	15.4	14.0	13.0	11.8	9.4	8.7

出典：表4に同じ，p.67

表6-2 最近の人口増減とその理由（1,000人）

	増	減	自然増	人口移動
1989		162.7	256.1	-93.4
1990		102.8	233.7	-130.9
1991		170.5	219.4	-48.9
1992		22.1	201.3	-179.2
1993		-43.3	159.9	-203.2
1994		-263.3	145.8	-409.1

出典：表4に同じ，p.67

過がみられる。従って、ここ数年のカザフスタンの人口は停滞、減少を示し、1990年1679.3万人、1992年1698.4万人、1995年1667.9万人、1996年1653.3万人となっている。

カザフ人の全人口に占める比重増は、この他中国、モンゴルからのカザフ人の帰国のほか、自然増によるところが大である。その出生率などは表6-1、6-2の通りで、92年以降出生率減、死亡率上昇となり、自然増加率が以前より下っている。その民族別は表7のようであるが、カザフ人の自然増が多く、ロシア、ウクライナ、ベラルーシなかでもロシア人の自然減は目立っている。その結果、92年までの年間20万人以上の自然増が93年以降15万人前後に低下した。しかし、カザフ人の増加、ロシア人などの減少は目立ち、これもカザフ人の人口比重の増大に貢献している。

以上の状況からカザフスタンの民族構成は1989年のカザフ人39.7%から1995年46%となった。1959年のカザフ人の比重30%、1970年の32.5%、1979年の36.0%に比べて徐々に増加してきた。

表7 民族別出生、死亡、自然増加（1,000人当り）

	1991			1994		
	出生	死亡	自然増	出生	死亡	自然増
カザフ	21.0	8.0	13.0	18.2	9.5	8.7
ベラルーシ	12.9	11.2	1.7	10.7	12.6	-1.9
ロシア	12.1	11.4	0.7	9.6	15.7	-6.1
ウクライナ	12.1	12.9	-0.8	10.0	14.7	-4.7

出典：表4に同じ，p.68

表8 カザフスタン人口の民族別比重の変化（%）

	1989	1994	1995
カザフ	39.7	44.3	46.0
ロシア	37.8	35.8	34.8
ドイツ	5.8	3.6	3.1
ウクライナ	5.4	5.1	4.9
ウズベク	2.0	2.2	2.3
タタール	2.0	2.0	1.9
ベラルーシ	1.1	1.1	1.0
アゼリ	0.6	0.6	0.6

出典：表4に同じ，p.66

一方、ロシア人の比率はそれぞれ37.8、34.8%と減少し、中心民族であるカザフ人の人口比重の増大が目覚ましい。また、1996年1月段階でロシア人その他の民族の流出とカザフ人の自然増を考慮すると、カザフ人が全人口の50%を占めるという数字に到達する。1989年の人口センサスの結果、カザフ人の数がカザフスタンで第一位になったと誇らしげに書いたカザフスタンの経済誌の記事が脳裡に残っているが、その後10年もたたない内に50%になるとはカザフ人にも想像できなかった大変化と思われる。

上記のような人口流出の結果、各地の人口にどのような変化をもたらしたかをみてみよう。州別人口数は表9の通りで、やはり北部のクスタナイ、アティラウ、アクチュビンスク、コクシェタウ州で減少、南部の南カザフスタン州で増加している。

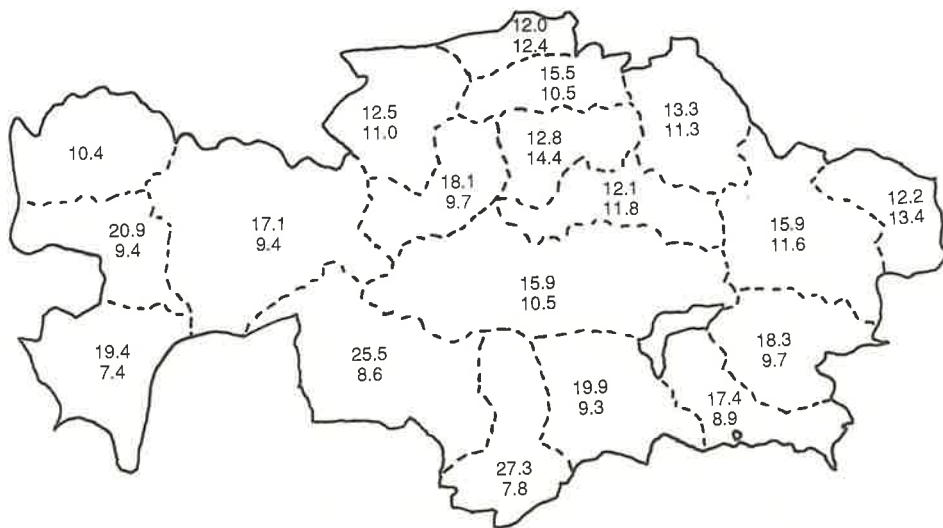
州別出生、死亡率は図9の通りで、南カザフスタン州の最高出生率を初めとして、カザフ人

表9 カザフスタンの州別人口 (1995)

	人口 (1,000人)	都市人口	農村人口	各州の人口/全人口	都市人口比重
カザフスタン	16,679.1	9,334.4	7,344.7	100.0	56.0
アクモリンスク	845.7	503.5	3,442.2	5.1	59.5
アクチュビンスク	752.8	403.3	349.5	4.5	53.6
アルマティンスク	963.1	213.8	749.3	5.8	22.2
アテイラウ	459.6	272.4	187.2	2.8	59.3
東カザフスタン	939.6	597.1	342.4	5.6	63.6
ジャンビル	1,039.6	483.5	556.1	6.2	46.5
ジェズカズガン	484.4	383.3	101.1	2.9	79.1
西カザフスタン	669.8	274.0	395.8	4.0	40.9
カラガンダ	1,270.1	1,077.3	192.8	7.6	84.8
クジイル・オルダ	674.7	431.6	243.1	4.1	63.7
コクシェタウ	657.0	258.4	398.6	3.9	39.3
クスタナイ	1,055.3	555.5	499.8	6.3	52.6
マンギスタウ	324.4	258.2	66.2	2.0	79.6
パフロダル	943.6	577.9	365.7	5.7	61.2
北カザフスタン	600.9	282.7	318.2	3.6	47.0
セミパラチンスク	811.0	407.3	403.7	4.9	50.2
タウディコルガン	721.5	310.8	410.7	4.3	43.1
トルガイ	305.9	98.0	207.9	1.8	32.0
南カザフスタン	1,987.8	773.4	1,214.4	11.9	38.9
アルマトイ	1,172.4	1,172.4	0	7.0	100.0

出典：表4に同じ，p.65

図9 カザフスタンの州別出生（上段）、死亡率（下段）(1995前期)



「カザフ共和国の社会発展」アルマトイ，1995，p.37

表10 州別カザフ、ロシア人の比率の変化 (%)

	ロ シ ア 人					カ ザ フ 人				
	南					部				
	1959	1970	1979	1989	1993	1959	1970	1979	1989	1993
アクチュビンスク	26.2	26.4	25.1	23.7	22.0	43.1	47.5	52.1	55.5	59.8
アルマトイ ¹⁾	42.4	37.8	35.3	31.2	29.4	32.1	38.3	41.3	45.3	50.2
グリエフ ²⁾	20.7	27.3	27.0	22.8	19.8	72.2	62.4	63.1	67.3	71.2
ジャンビル	31.4	32.4	30.4	26.5	24.1	39.1	40.7	44.0	48.8	56.7
クジイルオルダ	15.3	18.6	15.3	13.3	11.6	72.2	69.9	76.2	79.4	83.9
チムケント ³⁾	22.7	22.0	19.2	15.3	13.7	44.1	47.2	51.0	55.7	59.4
アルマトイ(市)	73.0	70.3	66.0	59.1	56.0	8.6	12.1	16.4	22.5	25.1
	北					部				
東カザフスタン	70.9	69.5	67.7	65.9	64.2	18.9	23.2	25.4	27.3	29.1
コクシェタウ	41.7	40.4	40.4	42.1	39.5	18.5	22.8	26.3	28.9	31.6
パフロダル	39.3	44.4	45.9	45.4	44.6	25.5	25.2	26.8	28.6	30.9
北カザフスタン	64.5	63.5	63.4	62.1	61.7	12.5	14.9	16.6	18.7	19.5
セミパラチンスク	45.2	40.9	39.1	36.0	34.5	35.8	43.7	48.0	51.9	55.6
ウラリスク ⁴⁾	41.5	38.4	37.2	34.4	33.3	45.9	49.3	51.5	55.8	57.6
アクモラ, カラガンダ, クスタナイ, トウルガイ, ジェズカズガン	44.2	47.3	47.5	45.7	45.7	18.8	18.7	21.1	23.7	26.0

- 1) タウディコルガン州を含む、 2) 1992年アティラウに改名、マンギタウ州を含む。
3) 1992年南カザフスタン州と改名、 4) 1992年西カザフスタン州と改名。

出典：ロバート カイザー，ジェフロチン「カザフスタンのロシア人とカザフ人の関係」, Post Soviet Geography 1995-5, p.260

の多い南部で多く、死亡率も低い。反対に北部で低出生、高死亡率がみられる。

この現象は表10のように、各州ごとの民族分布の相違から生じている。徐々に北部でもカザフ人の比重が増加している。

以上のように、最近のカザフスタンの宗教と人口動態について簡単に紹介した。今後のイスラムの政治、社会、経済に与える影響が関心を引くが、カザフアカデミーでは独立後政治と宗教の分離を維持してきたときいた。

中央アジアではカザフスタンが人口流動の最も著しい国で、他の諸国はタジキスタンを除いて大きくなく、現在移動数が減じてきている。カザフスタンも最近と同様の減少傾向があり、

1996年の予測でも流出者の多かった1994年の1/2、16.3万人としている。

カザフスタンでは共和国の人口流動の今後の予測として三つのシナリオをあげているが、いずれも人口流出超過で66万から167万までの大量流出を想定している。つまり今後もロシア人、ドイツ人、ユダヤ人の流出を予想している。ただし、経済が安定すれば、この動きを減少させ、流入増、入超もありうるであろう。カザフスタンの各地域は外に向いている（例えば、北部はロシアに）といわれ、カザフスタンの統合が国の重要な課題になっているが、人口動態の調整も課題解決をはかる上で重要な分野の一つなのである。

参考文献

- Бабакумаров Е. Ж., Куттыбаева Р. С., Спанов М. У., Социальное развитие республики Казахстан: региональный аспект, ИРК, Алматы, 1995
- Демографический ежегодник России, М., 1995
- Нефть и газ Казахстана, ИРК, Алматы, 1995
- Иссык – кульская декларация, центральноазиатская конференция по региональному сотрудничеству 5-7 июня, 1995
- Ким Г. Н., Мен Д. В., История и Культура корейцев Казахстана, Алматы, 1995
- Лебедева Н. М., Новая русская диаспора, М., 1995
- Содружество независимых государств в 1995 году, М., 1996
- Миграции и новые диаспоры в постсоветских государствах, ИЭИА РАН, М., 1996
- О демографической ситуации в 1995 году, ПРК, Алматы, 1996
- Окружающая Среда в СНГ, статистический сборник, М., 1996
- Реформы в регионах: Тенденции в 1995 году, ПРК, Алматы, 1996
- Уровень религиозности и конфессиональные ориентации населения республики Казахстана, ИРК, Алматы, 1996
- Численность и Миграция населения Российской Федерации, М., 1996
- Колхоз “Политотдел”, внешторгиздат
Тракторы, производственное объединение ташкентский тракторный завод
- Рыбаковский Л. Л., Миграционный обмен населением между центральной Азии и Россией, Соц. Ис., 1995-9
- Kyrgyz Republic, National Human Development Report.
- Republic of Uzbekistan: Reference book, Toshkent, Uzbekistan.
- Turkmenistan, Human Development Report 1995, The Akademy of Sciences, Ashgabat, 1995
- Kaiser R., Chinn J., The Russians, a New Minority in the Newly Independent States of the Former Soviet Union. Boulder, CO.
- Kaiser R, Chinn J., Russian-Kazakh Relations in Kazakhstan, Post Soviet Geography. 1995-5
- Robertson L. R., The Ethnic Composition of Migration in the Former Soviet Union, Post-Soviet Geography and Economics, 1996-2
- Tsukatani T., Sultangazin I. M., Current Economic Environment of Kazakhstan in 1995, JSSEES vol. 16, 1995
- Yoon C. S., Socioeconomic Conditions of Koreans in Central Asia, JSSEES, vol. 16, 1995
- Nomura M., Irrigated Agriculture and Economic Development in Turkmenistan, JSSEES vol. 16, 1995
- 緒方 修, シルクロード・未知の国—トルクメ

ンスタン最新事情一，芙蓉書房出版，1994
金田辰男，体制と人間—中央アジアの小国の再生，日本国際問題研究所，1995
中村泰三，「ソビエト中央アジアウズベク共和国の労働問題」、『人文研究』37-1，1985
中村泰三，「環境悪化，人口増加に悩むソ連中

央アジア」、『地理』34-7，1989
中村泰三，「最近のC I Sの人口動向」、『人文研究』46-7，1994
東勇次郎，「キルギス共和国経済の問題点と国際協力」、『ロシア・東欧学会年報24号』，1995